

第1500回（4月30日）

新来者と地域社会

——檜原村調査報告（2）——

石 原 豊 美

檜原村（東京都西多摩郡）への新来現象——都市の生活環境問題などを背景として、また農山村の保有する資源の享受を目的として、都市部から農山村への流入が行なわれるようになる現象一般をさすべく、このことばを用いることにする——はいくつかの層によって構成されているが、そのなかで流入定住と別荘利用の訪村との2つの層に着目して調査をすすめてきた。

流入定住も別荘利用も、地形的・地理的な制約や林業の不振による就業機会の減少などに起因する村からの人口の（挙家）流出を背景とし、また地価の相対的な安さや自然環境のゆたかさなどを誘因として、村当局の積極的な関与や業者による大規模な開発によることなく個別に行なわれてきたものである。また、流入定住については、主として男性を世帯主とする小家族が東京都西都市郡部から流入しているが、数年の内に再び転出してしまふ例も少なくない。

個々の新来者が抱える背景事情および檜原村への流入や訪村によって実現しようとする価値は多様で個性的である。

いくつか具体的な例をあげてみると、たとえば夫の死後、飲食店経営を経て檜原村へ流入定住したある女性は、「ひとりで何かしうて」「人から逃げてまわるようにして山の中へ行った」と述べていた。この女性は賃貸した空き家で画を描いたり畑仕事をしたりして過ごし、やがて年金が受給できるようになる頃「まちでも生活していける」と転出する。「山が好きで山で死にたいと思い」、退職後に持ち家を売却して流入してきた男性もいた。また、「年をとったら静かなところで暮らしたい」と希望していたある男性は、定年退職後、別荘

を建築し家族らと利用していたが、定住の希望は果たせないまま病死する。自営する飲食店の定休日に夫婦で地元の人たちに建ててもらった小屋へ通いつづけ、夫は眺望を楽しみ、妻は畑仕事にいそしんでいる例にも出会った。

村役場でのききとりによれば、空き家や土地売買にかんする新来予備群とでもいうべき層からの照会件数は少なくないそうである。が、じっさいに村に拠点を取得して流入定住や訪村を実現するにいたるためにはいくつもの条件がととのう必要がある。またたとえば別荘利用のばあい、拠点取得後も、1. 当初は熱心に通うが、次第に足が遠のいてくる、2. 別荘として、一定以上の期間コンスタントに利用する、3. 別荘として利用する期間を経、定年退職などを契機として定住へ発展する、のような可能な訪村の軌跡のなかで、1. または2. をたどるケースが多いようである。

檜原村への新来現象について、報告者は複数の泡状の個別的現象の集合物としての性格を保持しているといえるのではないかと考えている。また新来者たちについては、生活上のある時期に、たまたまこの村で、ささやかな夢の模索を行なっているのだと小括できないかと考えている。

檜原村調査はこれまで2期にわたって小規模に行なってきた。第1期の調査結果については第1436回定例研究会（平成元年9月12日）で報告済みであり、今回の報告は主として第2期の調査にもとづくものである。